

<b>Title</b>	韓国教会の成長と危機
<b>Author(s)</b>	高, 萬松
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No. 48 : 315-333
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2260">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/refs/modules/xoonips/detail.php?item_id=2260</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 韓国教会の成長と危機

高 萬 松

はじめに

韓国プロテスタント教会史において教会成長という主題は草創期から現在に至るまで重要な関心事の一つである。韓国では教会の量的成長を妨げる要因が多くあった。戦前には教会も三五年間にわたる日本帝国主义の治下に置かれて、迫害を受けたことも少なくはなかった。一九四五年に日本の植民地支配から「解放」され、一九四八年に朝鮮半島の南では大韓民国政府が樹立され、半島の北では北朝鮮政府が樹立された。共産主義からの迫害によって大勢のキリスト者達が南に移住し、さらに一九五〇年の朝鮮戦争の勃発によって、一般民衆と共に教会も共産主義から迫害を受け、大きな損害を受けた。朝鮮戦争の休戦（一九五三年）以降、教会は今まで、二つの革命、二〇年間の軍事独裁政権、民主化闘争を経験し、時には政権と妥協し庇護を受け、時には弾圧を受けた。また教会は、半島の南と北との政治的關係によつて影響を受けている。成長を妨げる多様な要因にもかかわらず、一九四五年までは緩やかな成長過程を経、その後は急激な成長過程を経て現在に至っている。しかし持続的成長の道を辿ってきた教会は、一九九〇年代から成長が停滞し、二〇〇〇年代に入るとマイナス成長に転化している。

本論文では韓国教会の量的成長に関する特徴的な点をあげてみたい。その特徴とは歴史的転換期においてキリスト教が諸宗教において主導権を握ったことである。そして韓国教会が置かれていた特殊な状況が教会の成長にプラスの要因として作用したという点をもあげてみる。時代区分は戦前と戦後に分け、そして韓国教会の現状と問題点について考察したいと思う。

## 1 戦前（一九四五年以前）の成長要因

### （一）状況

「韓国」<sup>(1)</sup> 最初の組織教会は、一八八五年四月に入国したアンダーウッド (H. G. Underwood, 1859-1916) によって一八八七年九月に設立された。<sup>(2)</sup> それ以降、一九四五年の「解放」<sup>(3)</sup> までの概略は以下の通りである。この期間、韓国教会は量的成長という側面において殆ど成長不可能と思われる状況に置かれていたが、持続的に成長した。宣教師達が最初に入国した頃には政府の鎖国政策の下で自由に宣教できなかった。アンダーウッドが洗礼を授ける時に、朝鮮の地ではなく、中国との辺境で行われたという話が伝えられている。韓国のキリスト教会は、草創期に、カトリックとの軋轢が生じた時もあった。<sup>(4)</sup> 「日韓併合」調印のあった頃（一九一〇年）、キリスト者は全人口の約一％に過ぎなかった。しかしキリスト教会は当時の韓国社会において唯一全国的な組織体系を持った機関であった。そのような組織網は後に各地方の成長拠点となったのである。

戦前の教会が量的に成長してきたことは統計から立証できる。一九〇七年に平壤で起きた「大復興運動」が成長の起

爆剤となったのは確かである。その前は、全国的に長老教会だけで信徒が四四、五八七人しかいなかった。<sup>(5)</sup>しかしその後、一九一〇年には約一万人にのぼった。一九三四年の統計では約二〇万人の信徒が数えられるように、一九一〇年から一九三〇年代半ばまでも緩慢な成長の道を辿った。しかし次のような激減期もあった。一九一〇年の日韓併合調印と一九一二年の「百五人事件」の後、「全体の信徒の数が決定的に減少し」、一九一九年の三・一運動直後にもそのような現象が起こった。<sup>(6)</sup>そして一九三八年に日本帝国主義が組織的に教会に神社参拝を強要した時から状況が変わった。神社参拝の問題で、一九四〇年までに三〇〇人の牧師と信徒達が投獄されたという報告がある。<sup>(7)</sup>一九四〇年代になると教会の成長は止まった。教会への弾圧による成長の衰退は必至であろう。「一九四二年の長老教会は前の年に比べて教会の数が七五〇減少し、信徒も七六、七四七人減った」という報告がそれを裏付けている。<sup>(8)</sup>

## (2) 成長の教会外的要因

韓国プロテスタント教会史において、教会の成長と発展の基盤はキリスト教が諸宗教において主導権を握ったことにあると考えられる。というのはキリスト教が韓国の歴史の転換期において国家と民衆の進路に至大な影響を与えたからである。その影響は宗教的な面だけではなく、社会的・倫理的な面にも及んだ。転換期の一つは韓国に最初の宣教師達が入国した時期である。キリスト教は、鎖国政策の余波で未開化の国の「政治的没落期」<sup>(9)</sup>に主導権を握ったのである。もう一つは一九四五年の「解放」の前後の時期である。朝鮮戦争前後の時期も含まれるこの時期にも、キリスト教が主導権を握ることによってそれ以降の教会の形成に大きな影響を与えた。

アンダーウッドが韓国教会史において顕著な業績を残したことは言うまでもないが、後述するアレンの存在なしには彼の入国は果たされなかった。閔庚培が「アレンなしには今日の韓国とその教会がこのような位置と歴史に到達できな

かったであろう」と言うように、宣教師兼医者であるアレン (H. N. Allen, 1858-1932) の貢献が大きい。開化期、朝鮮に最初に入国したアレンは彼以降の宣教師達の入国の道を備えた人物でもある。アレンは日記で次のように自らについて語っている。すなわち、彼は最初に中国宣教師として派遣されたが、そこを辞め、当時宣教が許されていなかった朝鮮に渡り、米国公使館付医者として勤務していた。<sup>11)</sup> 当時、朝鮮で開化派と守旧派との「甲申」政変が起きた。<sup>12)</sup> アレンは、その時に重傷を負った政府の高官 [Min Yong Ik] を治療し、彼 [Min] の命を救った。朝鮮王室から医術が認められたアレンは王室の侍医となった。政府はアレンに王立病院の建設を許可し、一八八五年二月に朝鮮最初の病院である「広恵院」が建てられた。その病院が「韓国最初の宣教機関として、すべての初期宣教師達の集場地」<sup>13)</sup> となった。アングルーウッドのような宣教師達はその病院を通して朝鮮に入国できた。それだけではなく、その病院からの医療宣教は韓国人のキリスト教に対する偏見を解消し、以降の一般庶民の改宗に決定的な役割を果たしたのである。

以上のような朝鮮における福音宣教の土壌は、一五〇年前の日本におけるそれと比べられる。両者は対極的である。日本の最初のプロテスタント宣教師ヘボン (James Curtis Hepburn, M.D., 1815-1911)<sup>14)</sup> と他の宣教師達は、当時一般民衆から「隔離」<sup>15)</sup> されていた。幕府の禁教政策の結果である。ヘボンより八ヶ月遅く来日した後述のネビウスも、結局宣教ができず、しばらく滞在した後日本宣教を放棄し中国に帰った。また日本で最初の教会の設立が一八七二年であったということを考慮すれば、朝鮮の宣教の土壌は日本より恵まれていたと思われる。

以上のような政治・社会的な要因の他に、韓国人特有の宗教性の問題もあげられる。当時韓国人の魂が空虚であったということである。民衆の宗教には儒教、仏教、そしてシャーマニズムなどがあつたが、これらは民衆の宗教的要求に応えられなかった。最も特徴的に現れたのが日露戦争の時である。民衆が彷徨って「だれを頼ってよいかわからない不信の世に、宣教師こそ頼りになる人であるということがすぐわかってきた」<sup>16)</sup> ののである。

### (3) 成長の教会内的要因

#### ① ネビアス (Nevis) 方法

中国の宣教師ネビアス (John Livingston Nevis, 1829-1893) は韓国教会の成長に大きく寄与した<sup>(17)</sup>。伝道・宣教の原理として「ネビアス方法」が韓国の宣教現場に適用された結果、教会は大きく量的に成長し、目に見えるような結果を生んだ。

当時、韓国滞在の宣教師達は皆若く、宣教の経験も浅かったために問題も多かった。宣教師間の不和もあって、何人かの宣教師は米国の宣教本部に辞職書を出すほどであった。彼らは一八九〇年四月にそのような問題の打開と宣教の促進のために経験豊かなネビアスをソウルに招き、二週間の講義を聞いた。ネビアス方法は、自立伝道 (self-propagation)、自立政治 (self-government)、自立経済 (self-support) という原理で構成されており、それに体系的聖書研究会が含まれている<sup>(18)</sup>。宣教師達はそれを応用して「韓国版ネビアス方法」を作成した。すなわち、一八九三年に宣教師公議会が決め韓国宣教に適用したのである。一〇箇条は以下の通りである。「一、労働者階級に優先的に伝道すること。二、家庭主婦の改宗を重要視すること。三、地方の都市に小学校を設立しキリスト教育を実施すること。四、韓国人牧師の養成に力を入れること。五、聖書の翻訳・出版に尽力すること。六、すべての宗教書籍はハングルで出版すること。七、自給自治の教会をつくること。八、信徒は誰でも伝道者となること。九、医療宣教師はキリストの愛で治療し患者を感化させること。十、地方に住んでいる患者の場合、往診の機会を作ってキリストの愛を体験させること」であった<sup>(19)</sup>。このような宣教方針は、聖書の言葉を基にし、キリストの愛を実践する内容だと思われるが、彼らはそれを受ける対象者として社会の弱者達を選んでいることがその特徴である。社会的弱者を対象とするということは、教会の量的成長と結び

ついている。当時八〇%以上の人口が農業に従事していた労働者階級、そして身分の弱い女性達を伝道の対象としたということは教会の量的成長に大きな影響を与えたに違いない。

ネビアスも日本と関わりのある宣教師なので簡略を見よう。彼は在中国宣教師であつて、実はヘボンより先に日本への宣教師として任命された。元々ネビアスが日本のプロテスタント教会の最初の宣教師となるはずであつたが、彼の日本への入国は遅れた。ネビアス夫妻は一八六〇年六月に神奈川に到着し、宣教のために日本に七ヶ月滞在した後、中国に帰つた。残念ながら彼は「日本においては宣教師として何も残さなかつた」<sup>(20)</sup>。ネビアス方法は韓国では成功し、中国では失敗した。断言はできないが、彼が日本に残つていたら日本教会の成長に別の可能性が開いたかも知れない。

## ② 伝道運動

戦前、大きな伝道運動が二つある。一つは平壤の「大復興運動」であり、もう一つは「百万人救霊運動」(Saving a Million Souls for Christ) と呼ばれるものである。

前者の意義は大きく二つ考えられる。一つは教会に量的成長をもたらしたということであり、もう一つは今までソウル中心にあつたキリスト教が平壤に移つたということである。キリスト教勢力の中心の移動である。元来その大復興運動は教会の成長を目指したものではなかつたが、教会に大きな量的成長をもたらした。それは毎年開かれる「聖書研究会」での祈りの中で、会衆達が罪を悔い改め、生まれ変わる経験をしたのがきっかけである。聖霊の働きを集団的に体験したその運動は、一つの教会だけではなく、平壤からソウルに、そして全国的に拡散された運動となつた。それは教会成長の起爆剤となつたのである。<sup>(21)</sup>

数値で見ると一九〇六年に二七、四〇七人であつた信徒の数が、一九〇八年には七二、九六八人となつた。また

一九〇九年には一一九、二七三人になった。<sup>(22)</sup> 大復興運動によって平壤だけでも三、〇〇〇人の求道者が出たという報告もあるほどである。それ以降一九四五年まで平壤は半島のキリスト教の中心地となったのである。

上記の「大復興運動」は時間が経つにつれ伝道の熱心が弱くなっていた。一九〇九年から一九一〇年の間には、もう一つの伝道運動が始まった。それが「百万人救霊運動」と呼ばれるものである。スローガンのような実りはなく、約五万人の求道者が出たという統計があるが、この伝道運動も全国に拡散された。

### ③ 指導者達の登場

一九〇七年に韓国人としては初めて七人の牧師が誕生した。そのうちの一人が「大復興運動」の主役であった吉善甫（キル ソンジュ）牧師である。吉牧師は一九〇七年から一九二〇年代まで活躍し、当時教会の信徒の中で、彼の影響を受けなかった人はいなかったといわれるほど、全国的に影響を及ぼした。もう一人は、一九一〇年代から一九三〇年代まで「大復興運動を全国的運動と昇華させた」<sup>(23)</sup> 人物であった金益斗（キム イキドゥ）牧師である。金牧師は全国各地でリバイバル集会を開き、奇跡を体験する病者も多くあつたと伝えられている。戦前と戦後にかけて韓国教会の指導者となった牧師達は青年時代に金益斗牧師の集会で回心し改宗した。彼らの中には神社参拝を拒んで獄中で殉教した朱基徹、プリンストン出身の保守的神学者朴亨龍、そして青山学院出身の自由主義的神学者金在俊牧師がいる。彼らがりバイバル集会で改宗の体験をしたということは、韓国人の宗教性の根底を言い表しており、知性より感情を重んじる氣質が基底にあるということを示唆するであろう。

金益斗牧師が本格的に活躍したのは一九一九年一二月からである。その時代に三・一独立運動の失敗を経験した一般民衆は深刻な民族的挫折に苦しんでいた。また教会は、日本帝国主義からの迫害だけではなく、世俗的文明、道徳的荒廃、自由主義、共産主義などから悪い影響も受けていた頃である。そのような時代に、彼は独特な使命を持って韓国教



会の転換期を導いた。<sup>(24)</sup> 金牧師が接触した人々は貧しき者、病者、また社会からの疎外層の人々であった。金牧師の素朴な信仰はそのような民衆に訴える力となり、彼の説教は民衆に希望を与えたため、一般の庶民から歓迎された。ある意味では彼の集会は、民衆の憤りを宗教的に昇華させた「カタルシス」であったかも知れない。

#### ④ 教会成長をもたらした伝統と習慣

ここでは草創期から一九四五年以前の時期を見てみよう。この時期において教会が大きく成長した理由の一つには、教会が常に伝道に励まされたということがある。戦前、延禧専門学校の教授であったローズの表現を借りれば「証しする教会<sup>(25)</sup>」である。例えば、洗礼志願者達が洗礼問答を受ける時、必ず「聖書朗読と祈りの習慣、イエス・キリストの救いの計画、罪の悔い改め、結婚関係、そして他人に福音を伝えたことがあるかどうか<sup>(26)</sup>」などが問われた。<sup>(26)</sup> このような伝道の習慣は少なくとも一九三〇年代半ばまで守られたと見られる。<sup>(27)</sup> 前述のネビアス方法に「自立伝道」という項目があった。それは伝道のことである。初期宣教師達に伝道の場を提供したのが韓国特有の市場である。市場は、主要都市で五日毎に開設されていて、それは民衆にとって物々交換の場、情報交換の場であったが、宣教師達はそれを「伝道」の場として活用したのである。

第二に「祈り」の習慣を見よう。特徴的なことは「早天祈祷会」である。それは一九一〇年以前に韓国教会に定着し始めた。<sup>(28)</sup> 一九〇九年に、平壤の教会で行われた初めての早天祈祷会には六〇〇人が参加し、八日目にはお金の代わりに伝道する日として一日が捧げられた。それは「伝道」日奉献 (day-offering) と呼ばれている。その日に信徒達が約束した「伝道日奉献」を合算すると、三、〇〇〇日を越えたようである。早天祈祷会は、信徒の教会への無関心を癒し、他方では伝道への意欲を回復させるきっかけになったのである。

現今、数万人が集まる「早天祈祷会」として有名なソウル所在の明星教会の牧師は、「多くの牧師達が教会の成長に

ついで知りましたが、特に成長の要因があるとしたら、恐らく早天祈祷会が原動力となったと思います<sup>(29)</sup>と言  
う。それは現在でも続けられている。(また韓国では一八九三年から「水曜祈祷会」があった。)

## 2 戦後(一九四五年以後)における成長要因

### (1) 状況

「解放」の直後に海外から韓国に戻り、また共産主義の迫害のあった半島の北から南に帰還した人は約二〇〇万人に  
のぼる。一九四八年になると半島の南には民主主義の政府が、北には共産主義の政府が樹立された。特に北朝鮮では金  
日成共産党政権が確立されたために統一の展望がなくなり、大勢の牧師達が北朝鮮から南に逃れて来た。ほとんどの牧  
師が新しく牧会し始めたので、南側の教会の成長に大きく貢献した。<sup>(30)</sup> 韓国教会の再編成の機会が到来したのである。

一九四八年に韓国政府が樹立されると、キリスト者である李承晩(一八七五—一九六五)が初代大統領になった。<sup>(31)</sup>  
彼の下でキリスト教は諸宗教の中から主導権を握って、戦後再び量的成長の基盤を作ることができた。一九五〇年に  
六〇万人であった信徒の教が、一九六〇年に一一四万人に急成長したという統計が示しているように、恐らくその政権  
による庇護があつたに違いない。一九六〇年代以降、韓国教会は爆発的成長を成し遂げる。韓国では大きな教会が「祈  
祷院」を運営することが多い。韓国で祈祷院はだいたい山中に建てられ、そこで集会が持たれている。小さなバイバ  
ル集会が行われ、また静かに祈る場所でもある。一九六〇年代からそのような祈祷院が多く建てられ、その祈祷院  
を中心とした信仰運動が活発化した。一九七〇年代は癒しの祝福を強調するリバイバル運動が盛んであつた。そして

一九八〇年代は小グループを形成してそこから弟子を育てるような動きが活発になった。一九六〇年代から一九八〇年代は以上のような特徴があげられる。それらが教会の成長のモチーフを提供したと思われる。<sup>(32)</sup>

## (2) 朝鮮戦争(一九五〇—一九五三年)の影響

一九五〇年の朝鮮戦争の勃発は韓国教会にも悲劇をもたらした。それは半島の北にあった諸教会の喪失である。李光順は「解放を迎えて韓国教会は苦しい出発をした。それは国土の分断と共に受けた教会の分断であり、戦争に伴って半島の半分、エルサレムと呼ばれるほど成長してきた平壤にあった北の教会を失う苦痛であった」と言う。<sup>(33)</sup>一方では北に健在していた諸教会の喪失という見方も可能であるが、他方では半島におけるキリスト教勢力の再編成という見方も可能であろう。北にも大勢の信者が残っていたと思われるが、迫害を逃れて、南に避難した信者も多い。その戦争によって牧師と信徒達の大移動があった。それは半島におけるキリスト教の再編成と言ってよいであろう。今まで北の方が中心であったとするならば、その中心が南に移動した。韓国のキリスト教の勢力は平壤からソウルへ移動したのである。

元来は半島の北の方で牧師を勤めていたが、「解放」の後に南の方に移り、ソウルで教会を開拓し、大きな教会に成長させた牧師がいる。永楽教会の韓景職牧師である。彼が一九六六年一月二十六日、「ベルリン世界伝道大会」で次のように報告した。「第二次世界大戦の前には、北部の方に教会は多かったです。すなわち、韓国キリスト者の三分の二が北部に住んでいました。一九五〇年に共産主義者の侵略が始まってから、その迫害に耐えられず、全てではありませんが、大勢のキリスト者が南の方に避難してきました。彼らは福音を携えて至る所に散って行き、新しい教会を建てました」と語った。<sup>(34)</sup>これは当時の実状と理解してよい。統計によれば一九四二年に朝鮮半島で長老教会の信徒の数は二四九、六六六人である。南と北との分断後、一九五九年の統計では前述の四倍の八九二、〇八三人であった。この数値

は韓国長老教団の中の大きな教派を除いた数値なので、すべての信徒を網羅した数値ではないが、戦争後、韓国教会の成長を示すであろう。<sup>(35)</sup> 韓景職によれば、ソウル市内で三〇しか存在しなかった教会が六〇〇教会となり、一九六〇年代の半ばには全人口の七％がキリスト者となったと報告している。<sup>(36)</sup>

「朝鮮戦争」の前後、大勢の北の住民達が南下したということについて前述した。その中の絶対多数をキリスト者達が占めていたということ、そして朝鮮戦争中の北朝鮮からの捕虜の中に大勢のキリスト者が含まれていたということも看過できない。当時の捕虜は一二万二千人にのぼる。その中で反共思想を持った捕虜は各地に分散収容されていた。その収容所においても伝道が行われ、その中から牧師となった人も数百人にのぼる。一九五一年四月から一年間で三回の洗礼式が行われ九〇〇人が洗礼を受け、さらに一、九七三人が洗礼の準備をしていた。収容所にあった教会に登録した人は一五、〇二二人であり、<sup>(37)</sup> 釈放された二七、〇〇〇人の反共捕虜達には大勢のキリスト者も含まれていた。<sup>(38)</sup>

### (3) 伝道運動

#### ① 最近の伝道運動

伝道にあたって目に付くのが目標値、あるいはスローガンと呼ばれるものである。有力長老教団が昨年掲げた「イエス長」「イエス教長老会」「三百万信徒運動」もそれである。教会の成長が停滞し、教会に対する社会の信頼度が低くなっている中、それは「一次的な教会の更新運動である。この運動が決して教会の勢力拡大と量的成長のための伝道運動に結ばれてはならない」という指摘は妥当である。<sup>(39)</sup>

戦後間もないうちは全民族の十分の一、つまり、一〇％という目標を立てて伝道始めた。<sup>(40)</sup> 当時の人口は三〇〇万であったので、三〇〇万人を目標としていた。一九六五年は、最初の外国人宣教師が殉教した年の一〇〇周年であり、

教会は「三千万人をキリストに」というスローガンを掲げて全国福音化運動を展開し、一九八五年の宣教一〇〇周年記念伝道集会の時には「全民族をキリスト教へ」というスローガンを掲げた。

## ② 兵士達への伝道

青年をどのようにして教会に招くかというのは、日韓ともに現代教会の大きな課題である。韓国では教会に青年達を送る供給源として、軍隊があげられる。毎年、三〇万人の青年が軍隊に入り、またそこから三〇万人の青年が社会に戻る。そこで教会は、数千人の兵士達に集団的に洗礼を授けている。例えば、長老教団においても、二〇〇一年二月に、一度に二、六四〇人を対象にして洗礼を授けたという報告がある。<sup>(42)</sup> 現在、軍隊におけるキリスト者の割合は約五五%であるが、二〇二〇年までのその目標が七五%と設定されている。<sup>(43)</sup> 質はともかくして、量的な成長目標が立てられていることは確かであろう。

## (4) 成長の実態

まず、教会数の推移を見よう。教会数は一九五〇年に三、一一四、一九六〇年に五、〇一一、一九七〇年に一二、八六六、一九八〇年に二一、二四三、一九九〇年に三五、八一九、一九九三年には四二、五八九と増加した。これを見ると、教会の成長は持続的成長であった。一九六〇年と一九九三年の間には七五〇%の増加である。

信徒数の推移は以下の通りである。一九五〇年に五〇〇、一九八人、一九六〇年に六二三、〇七二人、一九七〇年に三、一九二、六二一人、一九七七年に五、〇〇一、四九一人、一九八五年に六、四八九、二八二人、一九九一年に八、〇三七、四六四人、一九九四年に八、二四六、五五六人であった。一九六〇年と一九七〇年の間に四一二%増加し、それ以降も

平均三〇%という増加であつたが、一九九一年と一九九四年の間の三年間の増加率は一・四%しかなかった。<sup>(44)</sup>

### 3 現状と問題点

韓国教会では「成長」という言葉にとらわれて、一般の人々、あるいは、多くの書物においても「全人口の二五%、一二〇〇万人の信徒」という言葉が漠然と用いられてきた。また何の拒否感もなしに、今までその言葉の通り受け入れられたのではないかと思われる。

二〇〇三年に出版された韓国の有力長老教団の教団史においても、前述と同様に現状をあまりに意識していない面が見られる。その教団史には、「韓国教会は一九七〇年代、一九八〇年代を過ぎてから信徒一二〇〇万という驚くべき成長を遂げた<sup>(45)</sup>」と述べられている。これは訂正されなければならない。一二〇〇万という数値は各宗教団体が政府に報告した内容に基づいたものである。例えば、一九九二年一二月に各宗教団体が政府に報告した信徒の統計を合算すれば、全人口を上回る（総人口は四二〇〇万人であつたのに宗教人口は六六〇〇万人になる。その中でキリスト教は一四五〇万人となっている<sup>(46)</sup>）。しかし、二〇〇五年度の政府の統計が出ている。これこそが信憑性のある数値である。それによればキリスト者の人口は八六二万人（全人口の一八%）であつたのである。カトリックを除いた数値で、これこそ最も信頼できると言える。

上記の政府の統計数値の結果、信徒の数が前回（一九九五年）の統計より一四四、〇〇〇人減つているということが確認された。教会の成長が一九九〇年代後半から停滞し、二〇〇〇年代からは減少の推移であろう<sup>(47)</sup>。李ウオンキュは教会成長の鈍化の原因を次のようにあげている。<sup>(48)</sup> 余暇産業が発達したということ、経済の発展、そして社会政治的發展で

ある。余暇産業の発展は個人の精神的緊張を緩和し、宗教の代わりの役割を担っている。経済的にも余裕が出て、貧困に対する切迫感がなくなった。むしろ、経済的余裕によって人生を楽しむことのみ関心を持つようになった。また政治的發展に伴う民主化、社会福祉の改善によって、社会的不安の心理も弱まっていた。これらにもう一つ加えるならば、過去の二つの政権によって施行された北朝鮮への「太陽政策」が、戦争に対する不安を無くし、信仰心を弱めたのではないかと思われる。このような社会全体の雰囲気の中で、さらにキリスト教会が社会から信頼を失っている現状がある。二〇〇八年の「韓国教会の社会的信頼度世論調査」<sup>(9)</sup>によれば、調査対象者の中で韓国教会を信頼するという応答者は一八・四％に過ぎず、「信頼しない」という応答は四八・八％であった。さらに宗教を持たない人々が韓国教会を信頼するという応答は七・五％、「信頼しない」という応答は五二・七％であった。宗教機関の評価についても、カトリックは三五・二％、仏教が三一・一％であったのに、プロテスタント教会は一八％であった。二〇〇〇年に入ってカトリックが急成長している理由の一つである。カトリックは一九九五年の統計で二九五万人であったが、二〇〇五年の統計では五一四万人になり、五年で二一九万人が増えた結果になる（七四・四％と急成長）。

ではプロテスタント教会全体にはどういう現象が起きているのか。信徒の「水平移動」がある。水平移動とは、教会に求道者が増えるということではなく、既存のキリスト者の教会間の移動のことである。現今の傾向として、小さな教会から大型の教会への移動が目立っている。その結果、小規模の教会はどんどん小さくなり、遂には閉鎖する危機に直面している。反対に何千人から数万人の教会は、さらに量的に急増する現象である。

教会内部の問題も指摘できる。そのため教会に対する社会の評判が悪く、信頼度が低い。その理由として、教会の世襲の問題が指摘されている。一つの教会で起きているうちは社会的な問題とはならないが、これが幾つかの大型の教会で見られる現象であるために大きな問題となっている。

## 結び

韓国プロテスタント教会も歴史の流れの中を歩んできた。キリスト教が歴史の転換期において諸宗教の中から主導権を握ったこと、そしてその転換期を通してキリスト教の勢力の中心地が移動したということは意味深い。草創期には、政治的没落期に宗教的・社会的・倫理的な力を発揮することによって、キリスト教が諸宗教から主導権を確立できた。その結果、一般民衆に内在していたキリスト教への偏見が次第になくなり、多くの改宗者を得ることができた。その主導権は一九四五年の「解放」に至るまで続いたと見てよいであろう。戦後は、「解放」と一九五〇年の「朝鮮戦争」の勃発によって朝鮮半島のキリスト教勢力の中心地が変わった。平壤からソウルへの移動であった。共産主義からの迫害で半島の北の地域にあった諸教会は失われたが、その代わりに大勢の牧師達が南に避難し教会を建て、教会の成長に寄与した。

戦後、教会は一九九〇年までは急成長の道を辿ってきた。信憑性のある政府の統計によれば、信徒の数が前回（一九九五年）の統計より一四四、〇〇〇人減っている。教会の成長が一九九〇年代後半から停滞し、二〇〇〇年代からは減少の推移であった。キリスト者の減少だけではなく、社会からの信頼を得られないキリスト教となっているのが現状である。それが教会の危機である。

韓国のキリスト者の割合は、今まで漠然と用いられている全人口の二五％の一二〇〇万の信徒ではない。そうではなく、全人口の一八・三％の八六二万人なのである。<sup>50</sup>



## 注

- (1) 一九四八年に大韓民国政府が樹立され、それ以前は「朝鮮」と呼ばれていたが、ここでは混乱を防ぐため「韓国」という表記を優先する。
- (2) 一人の信徒が集まって二人の長老を選任し、最初の長老教会となった。厳密に言えば、アンダーウッドの入国の前、一八八三年五月に半島の西北地域の黄海道に信徒の集まりとして「ソレ教会」という非組織教会があった。
- (3) 以下「解放」とは、韓国が一九四五年八月二五日に日本の植民地支配から解放されたことを意味する。
- (4) 例えば一八九九年に黄海道載寧郡垣内洞という町では、プロテスタント教徒が礼拝堂を建築しようとした時、百人余りのカトリック教徒が集団に暴行を加え、礼拝堂の共同使用を要求した。閔庚培『韓国基督教会史』延世大学校出版部、二〇〇九年、一九二頁。
- (5) H. A. Rhodes, *History of the Korea Mission Presbyterian Church U. S. A. 1884-1934*, Presbyterian Church of Korea Department of Education, 1934 (韓国語訳『米国北長老教韓国宣教会史』崔ゼコン訳、延世大学校出版部、二〇〇九年、五二九頁)。長老教会だけの統計によれば、一九〇九―一九一〇年に非組織教会が一、〇六五箇所、組織教会が六五箇所、洗礼者が三二、五〇九人、全信徒が一〇、三六二人である。それが一九三二―一九三三年には非組織教会が八四七箇所、組織教会が七四六箇所、洗礼者が七四、五六六人(部分的な数値)、全信徒が一九九、六二五人となっている。
- (6) 同上書、五三四頁。
- (7) 閔庚培、前掲書、五一六頁。
- (8) 大韓イエス教長老会総会歴史委員会編『大韓イエス教長老教会史 上』韓国長老教出版社、二〇〇三年、四五二頁。
- (9) 同上書、一八六頁。
- (10) 閔庚培『アレンの宣教と近代韓美外交』延世大学校出版部、一九九二年、一二八頁。

- (11) H. N. Allen, *H. N. Allen's Diary*, Dankook University Press, 2008, 395 (『アレンの日記』金源模訳、檀国大学校出版部、二〇〇八年)。
- (12) 朝鮮では、「西洋や日中との関係が深まるにつれ、西洋文明を参照しつつ国内を改革しようとする開化派の知識人が現れた。開化派は一八九四年二月四日、郵政局(郵便局)の開局祝賀宴を好機としてクーデターを起こした」。それを「甲申政変」と呼ぶ。三谷博他編『大人のための近現代史』東京大学出版会、二〇〇九年、二二二頁。
- (13) 徐正敏『済衆院と初期韓国基督教』延世大学校出版部、二〇〇三年、一一九頁。
- (14) ヘボン は前述のアレンと交わりがあった。アレンの一八八七年一月二九日の日記にはヘボンの家への訪問記録がある。「私は昨日、日本駐在の米国長老教牧師へ、ヘボン博士夫妻を訪問した。ヘボン博士からは歓待を受けたが、奥様からはそうではなかった」。Allen, *op.cit.*, 527.
- (15) 中島耕二他『長老・改革教会来日宣教師事典』新教出版社、二〇〇三年、二八頁。
- (16) H. G. Underwood『朝鮮の呼び声』韓ソクヒ訳、未來社、一九七六年、一四八頁。
- (17) 米国長老教会海外宣教局は一八五九年一月一二日に委員会を開き、ネビアスを正宣教師と任命した。しかし彼は日本には何も影響を及ぼさなかった。中島耕二、前掲書、二七頁。
- (18) 金仁洙「一九〇七年平壤信仰覚醒運動の歴史的背景」、『教会と神学』春号、長老会神学大学校、二〇〇七年、三一頁。cf. Charles Allen Clark, *The Nevius Plan for Mission Work: Illustrated in Korea*, Christian Literature Society, 1937 (韓国語訳)、『韓国教会とネビアス宣教政策』朴容奎訳、大韓基督教書会、一九九四年、三三二頁)。
- (19) 金良善『韓国基督教史研究』基督教文社、一九七一年、七三頁。
- (20) 中島耕二、前掲書、二八頁。それで、ヘボンが最初のプロテスタント宣教師となった。
- (21) Kim In Seo, *Ju Gi-Chew: The Life of The Reverend Soyang Ju Gi-Chew, Lamb of Jesus*, Presbyterian College and Theological Seminary Press, 2008, 32.
- (22) Clark (1937) の統計による。朴容奎訳、前掲書、三八二―三頁。
- (23) 朴容奎『韓国基督教会史 2』いのちのことは社、二〇〇六年、二八〇頁。
- (24) 関庚培、前掲書、四二五頁。

- (25) Rhodes, *op. cit.*, 247.
- (26) *Ibid.*
- (27) *Ibid.*, 374.
- (28) 玉聖得「平壤大復興運動と吉善宇宙靈性の道教的影響」、『韓国基督教と歴史』二五号、韓国基督教歴史研究所、二〇〇六年、九二頁。
- (29) 韓崇弘「金三煥牧師の牧会哲学」、『教会と神学』夏号、長老会神学大学校、二〇〇六年、一〇五頁。その教会は毎日の早天祈祷会の以外に、毎年二回の特別早天祈祷会がある。その時には、毎日平均三〇、〇〇〇〜三五、〇〇〇人が参加している。
- (30) 大韓イエス教長老会總會歴史委員会編『大韓イエス教長老教会史 下』韓国長老教出版社、二〇〇三年、四三頁（以下、『長老教会史 下』と略記）。
- (31) プリンストン大学大学院、国際政治学博士。
- (32) 一九六〇年代以降の状況は、長老会神学大学校の韓国一教授による。韓国「『生命的観点で見た教会成長』、『教会と神学』秋号、長老会神学大学校、二〇〇六年、七四頁。
- (33) 李光順「二〇世紀韓国教会の宣教的挑戦と展望」、『教会と神学』三七号、長老会神学大学校、一九九九年、六五頁。
- (34) 韓景職『韓景職牧師説教全集』九卷、韓景職牧師記念事業会、二〇〇九年、二八九頁。
- (35) 李光順、前掲書。
- (36) 韓景職、前掲書、二九〇頁。
- (37) 徐正敏『韓国教会社会運動史』イレ書院、一九九五年、二七二頁。
- (38) 戦争捕虜に伝道して、一五万の捕虜のうち、約二万が福音を受け入れ、その中で一五〇人が牧師となったということである。韓景職、前掲書、二九〇頁。
- (39) 林熙國「韓国教会の社会的公的責任と『イエス長三〇〇万信徒運動』、『三百万信徒運動と韓国教会の公的責任』公的神学と教会研究所、第一回公開講座、於韓国教会二〇〇周年記念館（二〇〇九・六・一五）、一六頁、未出版。
- (40) 『長老教会史 下』、四五頁。

- (41) 同上書、一七九頁。
- (42) 「総会の知らせ」、『教会と神学』四四号、長老会神学大学、二〇〇一年、一九〇頁。
- (43) 『長老教会史 下』三三二頁。
- (44) 資料の特性上、一九九二年現在である。李ウオンキユ『韓国教会何が問題か?』監理教神学大学校出版部、一九九八年、一六七頁。一九九二年現在韓国では一七の既成宗教と四〇〇余りの新興宗教がある。プロテスタント教会では一・一三の教派があり、仏教にも三六の派がある。
- (45) 同上書、二九一頁。
- (46) 同上書、一八八頁。
- (47) 李ウオンキユ『韓国教会の危機と希望』kmc、二〇一〇年、一一八頁。
- (48) 同上書、一三〇頁。
- (49) 李ウオンキユ、前掲書、二二六頁。
- (50) 二〇〇五年現在、仏教徒は約一、〇七〇万人(全体人口の二二・八%)、プロテスタント教徒は約八六〇万人(全体人口の一八・三%)、カトリック教徒は約五二五万人(全体人口の一〇・九%)である。プロテスタントとカトリックを合わせたキリスト教徒は、一、三八〇万人として全体人口の二九・二%に達する。李ウオンキユ、前掲書、五五頁。

本論文は、二〇一〇年三月一七日、ルーテル学院大学で開催された二〇一〇年度日本基督教学会関東支部会での発表に加筆・修正を施したものである。